平成 24 年 12 月 6 日

安芸区内公民館ネットワーク事業

安芸区の歴史探索ツアー「わが町 起業物語」

矢野かもじ

～形を変え、今へ受け継がれる伝統技術～

伝統産業「髢（かもじ）」 から 「洋かつら」へ

講師

- **矢野郷土史グループ「発喜会（ほきかい）」会長　楠（くすのき）　精洲（せいしゅう） さん**
- **株式会社　クスノキ　代表取締役　楠（くすのき）　輝歳（てるとし） さん**

矢野公民館

1. 古くからの歴史のある地域、矢野

古代　人が住みついたのは縄文時代の始め

中世　尾張・野間庄の野間氏が矢野に移り住み（1445年）、絵下山のふもとの発喜城を主城にした。
野間氏は戦国大名として領地内を治めた。

江戸期　・「かもじ」づくりが始まる・・江戸初期の寛永年間（1624～1643）に、
矢野に住む大阪屋（大官田）吉兵衛が創始者となりはじまったとされる。
試行錯誤の末、髪の油分の除去に成功。油抜きに矢野の粘土が適していた。

★「かもじ」とは・・・女性が髪形を整えるために、中に入れたり添えたりするもの

・海沿いの地区は漁船溜り、商港として栄えた。カキの養殖も盛んとなり、牡蠣料理を出す「かき船」が、阪神や瀬戸内海沿岸の各地に進出した。

近代　明治 30 年代、かもじ製品が外国輸出貿易品に。
同 36 年呉線（矢野駅設置、商業取引を容易に）
「髢之碑」大正 4 年（1915 年）

【矢野村「矢野町」（矢野村の中の矢野町）】

○江戸時代末期、村内は村方（地方浦）と町組（町方）に分かれ、47軒の町屋が軒を並べる。農業50％、商売・漁業50％。内陸をひかえ、海・港による海路の利便性。

○「（髢業は益々隆盛を加え）、村名を以ってするは本村発展上、不利益尠（すくな）からず」
⇒矢野町、 矢野村を町制にの村会決議書、 大正6年（1917）町制実施。

2. 矢野かもじ（髢）

（1）かもじづくりの工程　（スライド、資料1参照）

1. 下職（油抜き、染色、粗製品、かくさ（カラス）、抜き地製品）
2. 各種の本製品（ミノ組み、コマ作り）
3. 各種の日本髪かつら

（2）全国をまわる行商、牡蠣との関連性

「毛たぼ替え～！」

かもじの原料＝玉髪（たまげ）と言われる廃物の利用。全国各地の屑問屋（寄せ屋）。

のち、中国・韓国の輸入に。

（3）歴史的な歩み　ヘアピース・洋かつらの時代へ　（資料2参照）

3. かもじ産業の今

・・・伝統的な技を新しい時代に合わせ、活用していく

株式会社　クスノキ

・戦後、多くのかもじ業者が廃業していく中、新たな展開を模索し現在に。
　矢野のかもじの伝統技術を受け継ぐ唯一の会社

・広島県の伝統的工芸品の指定を受ける（平成 3 年）

・医療用ウィッグの生産

・DVD視聴 「広島発！夢の通り道　ウイッグのくすのき　伝統のかつら技術伝承」（2010 年 8 月放送）

参考1　かもじづくりの工程

参考2　矢野かもじ　の歴史的なあゆみ

髪形を整える入れ髪や添え髪から、日本髪かつら、そして「洋かつら」へと、使用の仕方を拡大させながら、独特の文化と産業を作りあげるかたちで発展。

（年表はかもじに関する大きな変化を中心に抜粋）

・1886年（明治19年）　第1回国内勧業博覧会に、初めて髢を出品。

・1902年（明治35年）　大阪府主催・第5回国内勧業博覧会にて、矢野のかもじは「全国唯一」の名声を博す。

・1915年（大正　4年）第一次世界大戦により、軍需品や日用品の需要が激増し景気が好転。中ごろより日本の輸出はすごい勢いで伸び始める。この年5月、大官田吉兵衛が産業功労者として、県知事より追賞される。これを機に10月、「髢之碑」を尾崎神社北麓に建設

・1917年ごろ　　矢野の髢が最も名声を全国に高め隆盛を誇った時代であった。

・1921年（大正10年）ごろ　一時衰退していた髢業が回復。矢野髢市を開設する。 これより大正の末まで、全国生産量の7割を占めるにいたり、髢業界は全盛を極める。矢野の住民の八割近くが髢に関わっていたといわれる。

（※大正9年　戸数1223戸　男2645人、女2853人　計5498人）

・1922年（大正11年）　4月皇后陛下、本県工啓の際、台覧に供し五点お買い上げ。

～このころより昭和12年ごろにかけて髢製品はあらゆる機会をとらえて出品展示し、宣伝された。～

・1927年（昭和　2年）金融大恐慌

・1937年（昭和12年）日本髪の時代からパーマネント・ウエーブなどの断髪の洋風スタイルに移行。

髢の需要が次第に減少していく。

・1939年（昭和14年）第二次世界大戦に突入。戦時体制となり、あらゆる物資が配給制となる。

生産に必要な材料等が入手が困難となる。

・1941年（昭和16年）太平洋戦争はじまる。このあとも細々と生産は続けられるも、戦争末期には完全な生産麻痺状態となる。（昭和初期には、半製品の髢から、かつらの製造の技術の方にウエイトが移り始める。）

・1945年（昭和20年）太平洋戦争終結

・1964年（昭和39年）ごろ　新型部分かつら（ヘアーピース）の需要高まる。

製造業者30軒以上、内職者数1000人以上と推測される。

・1967年（昭和42年）ごろ　沈滞から一変して急激な活況を呈す。

家内工業的な経営から、会社組織に変わり経営規模も大型化してゆく。

・1973年（昭和48年）石油ショック　大手メーカー進出や東南アジア方面の低賃金による廉価なものが出て、販売競争が熾烈化する。

・1975年（昭和50年）　矢野町が広島市と合併。低成長経済に突入、髢産業も衰退。業、廃業を余議無くされていく。

・1991年（平成　3年）　広島県が郷土広島の伝統的工芸品として「矢野かもじ」など九品目を指定。

資料1，2を作成するにあたり、以下の文書等を参考、抜粋させていただきました。
・発喜会「発喜山」より「矢野かもじ考　武田敬造」、「かき船繁昌記　浜尾卓次」、・広島市郷土資料館 「学習の手引き　第5号　かもじづくり」パンフレット、・広島市郷土資料館　資料解説書　第4集「かもじづくり」、・発喜会「郷土史講座　第四回　矢野の産業（その2）かき・かき船　テキスト

伝統工芸「矢野かもじ」から　現在の「洋かつら」まで

株式会社　クスノキ
楠　輝歳

1.「かもじ」・「かつら」(鬘)の由来

日本の結髪は遠く神代の昔から、日陰葛(ひかげかつら)や、えびす葛、つる草や草花を用いて頭髪を装飾したもので、これらの葛やつるが後の室町から江戸時代にかけて、添え髪をして髪の毛を束ねることにより「かつら」になり、髷(まげ)形をつくるなど種々の考案がなされた。

大宝律令には、六位以下の女官は儀式の際には、義髪（いれがみ・髪の少ない者が別に髪を足して結うこと・またその毛髪・いれげ・そえがみ・かもじ)、つまり「かもじをつけるべし」という規定があり、平安朝のきらびやかな宮廷生活が繰り広げられたものであろう。かもじ（髪文字・髢）は女房詞（にょうぼことば）のかみ（髪）であり、婦人の髪に添える加える髪・そえがみ・いれがみである。

「女重宝大成」には「色黒くしなやかならんは朝夕の心がけによるべし」とあり、また「徒然草」には「女の髪のめでたからんこそ人の目だつべかれ」と書き記されている。「多き」と「長き」と「太き」髪の人は、「矢野かもじ」にて朝夕の手入れを入念になし、「少なき」と「短かき」と［細き］髪の人は、言わずもがな「矢野かもじ」を用いて美の調和をはかられることこそ大切である。

かもじの碑
かもじ創業伝説や髪の毛の油抜きと染色の苦心談が語られている。

2. 髢(かもじ)の発祥

髢業の創始者は大阪屋吉兵衛（大官田吉兵衛）と伝えられていて、矢野村が町制施行前年の大正１４年の産業功労者として矢野村長から広島県知事への内申書には次のように記載されている。―矢野尾崎神社西麓の「髢の碑」の碑文より―「矢野特有物産たる髢は、寛永年間のころ大阪屋吉兵衛の発明せるものにして、その動機は吉兵衛が九州地方に旅行せし時に、人毛が竹藪の中に遺棄してあるのを見て、頭髪の抜毛も日々蒐集すればその量は多大なるべく、これが人工を加ふるときは、毛綱または婦人頭髪のうすきを補うことなど、利用の途多かるべしと種々の考案をめぐらすことにより、製法の研究を始めたものである。」はじめに、油抜きと称して屑髪にべったりと付着している油分《当時、髪型を整えていた鬢油（びんあぶら）―現在は結婚式用日本髪かつらや相撲の力士の髪型つくりに使用されている》の除去が最大の課題であった。数年の歳月を重ねて千辛万苦の末、矢野郷から産出した花崗岩が風化してできた真土（まさつち）の中の粘土が非常に強いアルカリ性を有していることがわかり、この粘土と水を撹き混ぜた上澄液を沸騰させた浴中に屑髪を入れ、やっと油抜きの技法が完成した。

原料（かもじ）の作業場～大正 10 年頃～

3. 広島県伝統的工芸品「矢野かもじ」について

広島県は郷土広島の風土と生活に育くまれた伝統的工芸品を保護・育成する目的で、平成３年度に「県伝統的工芸品」を指定し、まず第一弾として「矢野かもじ」など９品目が指定された。指定の条件は、「明治時代以前に確立した技術によって昔と同じ材料を使い手工業で製造していること」である。

「かもじ」は、女性の髪を整えるための入れ髪や添え髪に始まり、日本髪から「かつら」へと移行する。矢野の伝統的地場産業の「かもじ」が、県の「保護し育成する」対象になったことは喜ばしい。一般的には、すでに「かもじ」の命脈は「すでにことき れている。」と誤解・誤認されている向きもあるが、製品の形を変えて伝統の技術を駆使しながら新しい形で発展を続けている。

「矢野かもじ」の指定業者は、①クスノキ、②扇屋の２社である。クスノキは「洋かつら」を扇屋は「日本髪かつら」を主製品としている。現在は髪型の変化により日本髪は減少傾向にあり、洋もの（ミセス向け洋かつらからヤング向けヘアピース）の需要が主流となっている。㊟扇屋は５年前に廃業されました。

広島県伝統的工芸品指定申出書

平成２年12月20日

広島県知事　竹下虎之助　殿

申出者住所　広島市安芸区矢野東５丁目１－15
株式会社　クスノキ
氏名　代表取締役　楠　輝　歳　㊞
広島市安芸区矢野西５丁目３－15
株式会社　扇屋
代表取締役　勢　良　良　治　㊞

広島県伝統的工芸品指定要綱第３条第１項の規定に基づき，下記の工芸品を広島県伝統的工芸品として指定されるよう申し出ます。

記

1　工芸品の名称　矢野かもじ
2　代表的な製品の名称　ヘアピース
日本髪かつら
3　沿革（歴史）
江戸時代初期の寛永年間（1624－1643）に矢野（現在の広島市安芸区矢野）の大阪屋吉兵衛が始めたと伝えられ，その後盛衰を経て，明治初期から明治10年頃が第１期黄金期となった。髪型の変化と第二次世界大戦により，一時期低迷したが，昭和30年頃から新型ヘアピースで復活し，41年から48年まで洋かつらブームに乗り，第二期黄金期となった。現在では，髪型の欧米化が定着し，ヤング市場を中心としたファッション性の高いヘアピースの需要が定着し，業界を引っ張っている。
（注）　工芸品の発生時期から現在に至るまでを簡単明瞭に記入すること。
4　製造地域　広島市安芸区矢野
5　産地の概要

区分	61年	62年	63年	元年	2年
企業数	7社	5社	5社	4社	3社
従業者数	75人	50人	50人	48人	38人
年間生産数量	約6,000個	約4,800個	約3,600個	約3,600個	約3,600個
年間生産額	19,000千円	18,240千円	12,600千円	10,200千円	11,280千円

（注）　過去５年間の状況を記載すること。

4. 洋かつら・ヘアピースの発祥

「かもじ」から「洋かつら」への変遷は、３．の伝統的工芸品指定申請書及び個別調査表の中の沿革欄を参照してください。この中で、昭和４０年以降の洋かつらの流れを述べてみる。

当社は、「かもじ」を生業とし先代（実父）が大正１３年楠清藤商店として創業し、昭和４１年に小生が代表となり(株)楠人毛産業を設立した。この時期は丁度、「洋かつら」の発祥期に当たり、工業用動力ミシンを改良した「かつら専用動力ミシン」の開発時期でもあった。これにより、品質の安定した「洋かつら」が量産できる体制が確立し、国内販売及び一部輸出もできる体制になった。

これから約５年間の昭和４６年までは、国内の高度成長に乗った消費に助けられ飛躍的な発展を遂げた。同時に、この時期は使用原料の主力が原毛（人毛）から化繊（合成繊維）に移行する時期でもあった。この間、当社は、帝人(株)と生産委託契約を結び合繊製の製品の生産比率が約９０％までになった。このため、昭和４６年に(株)クスノキに社名変更し現在に至っている。

5. 洋かつら・ヘアピースから現在の「ウィッグ」の時代へ

第一期の技術革新が一段落した昭和４６年、その年のドルショック、昭和４８年のオイルショックにより、国内のかつら業界は大打撃を受け、労働集約型産業ゆえに人件費の安い東南アジアに生産基地を移行することになった。

昭和４６年には帝人(株)の協力を得て、韓国の工場建設に際して技術指導を行い、生産委託契約を結んだ。その後、韓国の人件費の高騰に伴い、昭和６２年に中国の山東省青島地区、北京に隣接する天津地区に移行し現在に至っている。この流れは、日本経済の流れの縮図であり、基幹産業より約２０年も早く、海外生産の先駆（さきがけ）を演じている。工場生産が安定し始めた平成時代になって、中国の工場からの欧米、特に米国のファッションの変化、日本国内のヤ

ングを中心としたファッションの多様化に合わせてウィッグ業界も第二期の技術革新が進み、ヤングから年配向けの「ツケ毛」(エクステンション)・「半かつら」(ハーフウィッグ)・「全かつら」(フルウィッグ)・「部分かつら」(フロントウィッグ)の品質が飛躍的に向上し、現在に見られるようなハイファッションの商品群が出現した。

6. クスノキの今とこれから

当社は前述のように、中国に生産委託工場を持ち、美容卸・アクセサリー卸・通販会社への供給体制を持ち、約８年前から広島・福岡の中心地に直営のアンテナショップを展開してきた。この流れをさらに発展させるために、昨年ＣＩを導入し、業界７８年の生き様とこれからのウィッグを育ててゆくポリシーを融合させ、当社のウィッグブランドである「Ｋｓｎｏｋ‘ｓ（クスノクス)」を直営店の店名とし、昨年１１月に広島は本通り、福岡は天神コアビルにリニューアルオープンいたしました。

店内はクスノキのポリシーである「鎮守の森」をイメージし、数多くの特製ガラスを使い淡緑を基調にした木漏(こも)れ日の雰囲気を演出しています。このため、今までになかったウィッグ専門店として、広島・福岡ともに各種のマスコミ（テレビ・新聞・各種情報誌）に取材・特集され現在に至っています。

今までの「かつら」というと薄毛対策が主たるものでしたが、現在の顧客ニーズは芸能界の俳優・歌手・タレントはじめ、従来の美容業界、化粧品業界、雑貨・アクセサリー業界にとどまらず、アパレル業界（トータルコーディネイト)、個人の教養・文化の分野（カラオケ・踊り・着物・フラダンス・音楽―ジャズ・ポップス・ＧＳなどの愛好家)、医療の分野（抗ガン剤による脱毛や円形脱毛症対策）など、色々な分野で「ウィッグ」が活用されています。店内には秘密の部屋があり、医療対策のお客様は勿論のこと、今から結婚式など各種パーティにご出席のお客様のために、試着室の隣りに着換室が常設されています。

（2002年原稿）

株式会社 クスノキ

本社：広島市安芸区矢野東５－１－１５
創業：大正１３年４月
資本金：２７百万円
従業員：１３名
事業内容：洋かつら類の製造販売
委託生産工場：
・中国・山東省青島市「山東芸品省公司」
・中国・天津市「天津維広工芸品有限公司」
直営店：
・クスノクス広島　TEL (082) 546-0744
　広島市中区本通り２－２
・クスノクス福岡　TEL (092) 716-1617
　福岡市中央区天神1-11-1天神コアビル4F
ＵＲＬ： http://www.ksnoks.jp
ＵＲＬ：http://rakuten.co.jp/wigya/

社長のプロフィール
楠　輝歳(くすのき　てるとし)

1940年　広島市安芸区矢野町生まれ
1963年　愛媛大学工学部卒業後、ダイハツ工業(株)入社
1967年　稼業の楠清藤商店を継承するため、㈱楠人毛産業を設立し、代表取締役に就任し、現在に至る。